

# 大学生における父親との愛着関係と社会性に関する一考察 —愛着尺度・EQT・SWT・WZT—

橋本 泰子

## キーワード

大学生 父親 愛着関係 社会性

**抄録：**幼時期における父親との愛着関係が、その後の対人関係の形成に重要であることが、これまで多数の研究で証明がなされてきている。

例えば、青年期の自我同一性の確立に、父親と男子のみならず、女子にも影響を及ぼすとされている。そこで、大学生を対象に幼児期における父親との愛着関係と情緒特性・対人適応等について検討を試みた。

対象は大学生で男子102名、女子99名、合計201名である。方法は、父親との愛着尺度・EQTテスト・星と波テスト・ワルテック描画テストを使用し、集団法で2009年5月に実施した。テスト結果から、父親との愛着関係の高い群は、情緒も安定し、社会スキルも高く、父親の役割が効果的に作用している。一方、低い群は、情緒不安定で、自己中心的傾向があり、問題行動を起こし易く、対人関係も回避的である。以上の結果から、家庭における「父親の役割」の重要性の見直しが必要と考察される。

**目的：**最近、さまざまな青少年を巡る問題行動が報告されている。08年度の神奈川県内における小中高で発生した暴力行為は、前年度比19.4%増の9232件と4年連続で全国最多となった。

一方、寝食も忘れて1日20時間以上もインターネットゲームにのめり込み、バーチャルな世界から脱出することが出来なくなり学校や職場に行けなくなる「ネトゲ廃人」が深刻化している。さらに、「引きこもり」の原因が、「就職や就労での挫折」が最多で、30～34歳が多く、全国で100万人を超えると推計されている。高塚（2008）によれば引きこもりの特徴として、1) 自己意識が強く状況変化に適応できない。2) 人と争って傷つく事を嫌う。3) 人間関係の訓練が不十分で、逆境に弱い。4) 親との関係がうまくいかない。と指摘している。

ところで、男女共同参画社会に向けて、家事・育児もする“新しい父親像”が求められているが、国際比較データでは、日本の父親が子供と接する時間は、短く稼ぎ手としての役割期待が高い（八木下，2010）。具体的には、男性の育休取得率は1.23%で、女性が9割超で、桁違いである。その理由として、「前の世代から受け継がれた性別役割分業」が、関係していると解説されている（八木下，2010）。林（1996）は、『父なき社会』ということで、父親が父親の役割を果たしていない。家族を統合し理念を掲げ文化を伝え、社会のルールを教えるという父の役割

が消えかけている。」と父親の現状を憂えている。

これまでに、英国の Bowlby (1958) は、「ある特定の間もしくは動物との間に形成される情愛の絆を愛着とし、これは、個体が自律性を獲得した後でも形を変え、生涯を通じて存在する。」と提唱している。久保田 (1995) は、「初期の親子関係のあり方が、その後の人間関係の形成に影響を及ぼす。」としている。また、柏木 (1994) は、「父親の育児や家事参加が高いと、子供への肯定感情が高まる。」としている。

その他にも、父親の役割の重要性については、多数研究がなされ、母親からの分離・個体化過程における父親の影響の重要性も明らかにされている。さらに、青年期の発達課題である自我同一性の確立に、父親との関係が、男子のみならず、女子にも影響を及ぼすとされている。

そこで、今回は、大学生を対象に幼児期における父親との愛着関係と情緒特性・対人適応や、さらに性別による比較を試みたので報告する。

**対象と方法：**対象は、都内四年制大学の学生 226 名で、不備のあった 25 名を除き (有効回答率 88.9%) で、男子 102 名、女子 99 名の合計 201 名である。使用した検査は、1) 父親との愛着尺度、2) EQ テスト、3) 星と波テスト、4) ワルテック描画テストで、2009 年 5 月に集団法で実施した。以下検査について、簡単に説明する。

- 1) 父親との愛着尺度：島谷・橋本 (2008) が作成した 10 項目の質問に対して、例えば、「父親におんぶや抱っこをしてもらった。」に、「いつもそうだった」から「ほとんどなかった」の 5 件法で回答する。
- 2) EQ テスト：米国のゴールマンによる「こころの知能指数」を改訂したもので、10 ファクターに対して 60 項目の質問から構成され、例えば「本音で話が出来る友人がたくさんいる。」に対して「ほとんどそうである」、「かなりそうである」、「どちらともいえない」、「まったく違う」、「すこし違う」の 5 件法で回答する。
- 3) 星と波テスト：アヴェ・ラルマンにより創案された投影法検査で、教示は「海の波の上に星空を書いて下さい」と教示し、描いた絵から対人関係・情緒特性等を解釈する。
- 4) ワルテック描画テスト：これも投影法検査である。8 つの四角形の描かれた用紙に、「8 の枠のすべてに、何かを書いて下さい」と教示をし、描画から対人適応等を解釈する。

**結果と考察：**まず、父親との愛着尺度の全体の平均 =  $32.9 \pm 8.29$  から群分けを行い、平均 + 1SD を高群 (男子 18 名、女子 23 名、平均年齢 =  $18.2 \pm 0.67$ )、平均 - 1SD を低群 (男子 = 19 名、女子 = 20 名、平均年齢 =  $18.2 \pm 0.37$ ) に区分して検査結果を検討した。

### 1) EQ テスト

#### (1) 高・低群間における検討

t 検定を用いて 2 群間の比較検討した結果を表 1 に示す。

表1 EQテストの高・低群のt検定の結果

ファクター	高 群		低 群		有意差
	平均	SD	平均	SD	
Aスマートさ	13.5	3.75	13.2	3.38	
B自己洞察	14.6	3.12	13.8	3.17	
C主体的決断	12.8	3.54	11.8	3.88	
D動機付け	13.7	3.82	12.7	4.3	
E楽観性	16.5	3.31	14.3	4.25 **	
F自己コントロール	12.9	4.14	11.75	2.95	
G愛他心	19	3.64	16.3	3.46 **	
H共感的理解	17.5	4.4	14.3	4.33 **	
I社会的スキル	16.3	4.41	13.3	4.43 *	
J社氣的器用さ	13.4	4.4	11.8	4.29	

\*p<.05 \*\*p<.01

次の4ファクターに高・低群間に有意差 ( $p < .01$ ) が認められた。楽観性：やりぬく信念となんとかなるといった楽観性がある。愛他心：競争と協調とのバランスをうまくとる。共感的理解：相手のみになって感情や考えをよく理解できる。社会的スキル：対人関係を円滑にするための技能をもっている。以上の結果から、高群は、共感性があり相手のことをよく理解し社会性がある。

(2) 性別による高・低群間の検討

t検定を用いて2群間の比較検討した結果を表2・3に示す。

表2 男子EQテストの高・低群のt検定結果の結果

ファクター	高 群		低 群		有意差
	平均	SD	平均	SD	
Aスマートさ	13	3.48	14.4	3.5	
B自己洞察	15.1	3.29	15.3	3.83	
C主体的決断	12.9	3.43	12.8	4.56	
D動機付け	13.4	4.03	13.8	4.9	
E楽観性	16.7	4.01	15.5	4.36	
F自己コントロール	13.5	3.97	13.8	3.11	
G愛他心	18.2	3.59	17.1	3.67	
H共感的理解	16.4	4.85	14.5	4.72	
I社会的スキル	15.8	4.14	13.8	4.86	
J社氣的器用さ	12.7	4.2	12.7	4.67	

表3 女子EQテストの高・低群のt検定結果の結果

ファクター	高 群		低 群		有意差
	平均	SD	平均	SD	
Aスマートさ	14	4.02	12	3.26 †	
B自己洞察	14.1	2.95	12.3	2.51 *	
C主体的決断	12.6	3.65	10.7	3.2 †	
D動機付け	14	3.6	11.6	3.6 *	
E楽観性	16.2	2.62	13.1	4.14 *	
F自己コントロール	12.3	4.3	9.7	2.78 *	
G愛他心	19.7	3.69	15.5	3.25 **	
H共感的理解	18.5	3.95	14	3.93 **	
I社会的スキル	16.8	4.69	12.8	3.99 *	
J社氣的器用さ	14	4.55	10.9	3.91 *	

†p<.01 \*p<.05 \*\*p<.01

男子間では、有意差が認められなかった。しかし、女子間では、次の8ファクターに有意差 ( $p < .01$ ,  $p < .05$ ) が認められた。自己洞察：自分の内面をよく察知できる。動機付け：自分の責任に置いて決断できる。楽観性・自己コントロール：不安・怒りなどの感情をコントロールできる。愛他心：競争と協調のバランスがとれる。共感的理解・社会的スキル・社会的器用さ：人と円滑に付き合い調和を保つことができる。次の2ファクターに有意傾向 ( $p < .10$ ) が認められた。スマートさ：心配りができる。主体的決断：自分の責任で決断できる。従って、高群の女子は低群の女子よりも、対人適応が良く社会スキルが高いと解釈される。

以下、父親との愛着関係の絆が強く結ばれている女子が、なぜEQテストの結果が高いのかに関して検討を試みることにする。春日 (2000) によれば、女子は男子よりも父親の愛情を敏感に感じ、父親からの愛情は女子の自我同一性・セルフエステームなど様々なものと関連を有する。つまり、父親から愛されているという確信は、その存在を支えるものとして重要な役割を果たしている。一方、父親からの愛情を十分に感じられない時、自己の存在に対して否定的な感情を抱く。さらに、父親と同一視することで、従来、男性性と言われてきた積極的な性質を取り入れるとされている。これらの理由から高群の女子において、EQ得点の高いことを裏付けるものと考察される。

その一方、男子の場合は、女子と異なりEQテストに差が認められなかった。これは、林 (1996) によれば、父親と息子の関係が最も複雑である。父親が息子を鍛えろとか、息子が父親を追い越すことは、両者が競争関係になることもある。子供が健全に育つためには権威像が必要であるが、日本社会は権威を意識的に無くしてしまった社会である。父親が権威をもって価値を示すことが出来ないと、子供は価値観を持つこと、社会人として必要な社会規範を身につけることも出来なくなる。信念やモラルという原理に従って、行動できなくなる。その場で自分の利益を追求するか、欲望を満たそうとすることしか出来ない人間になる。さらに、父親が「友達のような父親」を目指している場合には、子供は暴力的になるか、アパシーになると指摘している。

男子の場合は、女子よりは父親との愛着関係が、稀薄であると推察される。即ち、「父親喪失の世代間伝達」や「友達のような父親」の影響が「社会性の低さ」に反映されていることが窺われる。

2) 星と波テスト

表4 星と波テストの高・低群の $\chi^2$ 検定の結果

項目	高 N	群 %	低 N	群 %	有意差
1.空と海の バランス	1:1	18	43.2	13	33.3
	1:2	2	4.8	5	13
	2:1	16	28.4	16	41.6
	5:1	5	12	3	7.8
	その他	0	0	2	5.2
2.星と波の 距離	0~1cm	15	36	7	18.2
	1.1~2cm	10	24	6	15.6
	2.1~3cm	5	12	10	26
	3.1cm以上	11	26.4	16	41.6
3.星の数	1~3個	3	7.2	2	5.2
	4~10個	14	33.6	19	49.4
	11個以上	24	57.6	18	46.8
4.星の形	スター印	26	62.4	25	65
	丸	5	12	2	5.2
	変形	5	12	8	0
	流れ星	5	12	5	13
	混合	5	12	4	10.4
5.月	満月	6	14.4	5	13
	右弦	3	7.2	2	5.2
	左弦	12	28.8	7	18.2
	扇型	0	0	4	10.4
6.波形	大波	7	16.8	11	28.6
	三角波	5	12	3	7.8
	漣波	11	26.4	16	41.6
	なぎ	16	38.4	7	18.2
	凍結なし	2	4.8	1	2.6
7.描き方	強い	11	26.4	10	26
	普通	28	67.2	26	67.6
	薄い	2	4.8	3	7.8
	暗い空	7	16.8	7	18.2
8.その他	暗い海	3	7.2	4	10.4
	砂浜	4	9.6	5	13
9.不適応サイン	枠から出る	8	19.2	13	33.8
	枠に接しない	2	4.8	4	10.4
10.付加物	あり	20	48.8	34	87.2

$\chi^2$ 検定を用いて2群間の比較検討した結果を表4に示す。有意傾向が、「星と波の距離」と「付加物あり」に認められたのみで他にはなかった。

星と波の距離：対人距離を示す。0~1cmは高群36%・低群18.2%、3.1cm以上は高群26.4%・低群41.6%で有意傾向が認められた。高群は対人関係が親和的であるのに対して、低群は希薄である(図1、図2)。

\* $p < .10$  \*\* $p < .05$  \*\*\* $p < .01$

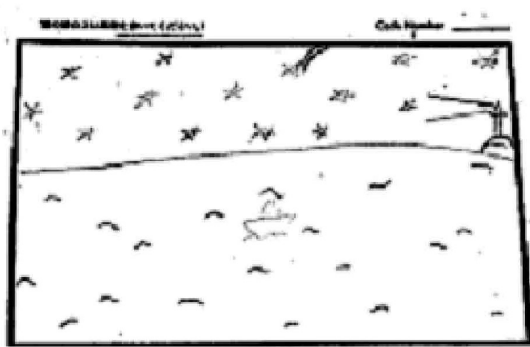


図1 高群の星と波テスト結果  
星と波が近い

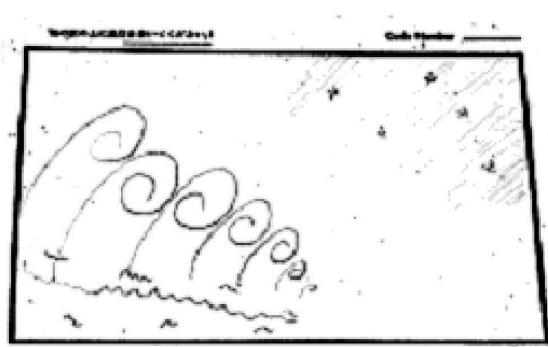


図2 低群の星と波テスト結果  
星と波に距離がある

月：母親イメージを表す。左弦は高群28.2%・低群18.2%、扇型は高群0%・低群10.4%、高群は母親と親和関係があるのに対して、低群に少数であるが、葛藤が認められる。

波型：情緒状態を表す。大波は高群16.8%・低群28.6%、漣は高群26.4%・低群41.6%、風は高群38.4%・低群18.2%、高群は情緒が安定しているのに対して、低群は焦燥感が窺われる(図3、図4)。

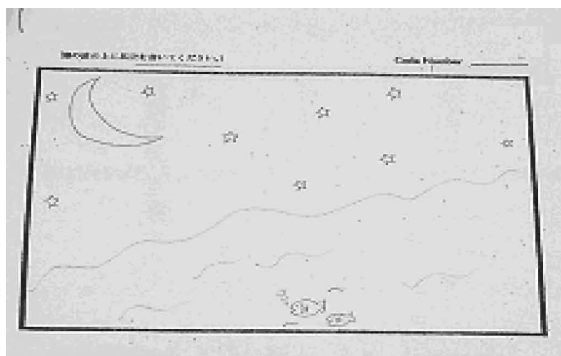


図3 高群の星と波テスト結果  
波が穏やか

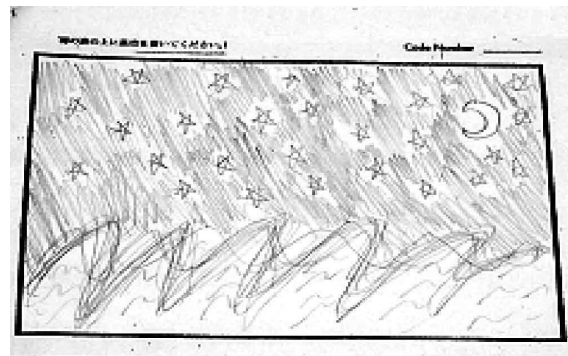


図4 低群の星と波テスト結果  
波が荒れている

不適応サイン：枠から出ているのは高群19.2%・低群33.8%で、低群は問題行動を起こし易いようである。

付加物：ありは高群48.8%・低群87.2%で、高群は指示通りに描いているのに対して、低群は様々なことを加筆してある。肯定的に解釈すれば、自由で創造的であるが、見方によれば、自己中心的で逸脱し易いと解釈される。

(2) 男子の高・低群間における検討

$\chi^2$ 検定を用いて2群間の比較検討した結果を表5に示す。

表5 男子の星と波テストの高・低群の $\chi^2$ 検定の結果

項目	高 N	群 %	低 N	群 %	有意差	
1.空と海の バランス	1:1	3	16.5	5	26.5	
	1:2	1	5.5	2	10.6	
	2:1	10	55.5	9	47.7	
	5:1	2	22	3	15.9	
	その他	0	0	0	0	
2.星と波の 距離	0~1cm	7	38.5	2	10.6	†
	1.1~2cm	1	5.5	4	21.2	
	2.1~3cm	1	5.5	4	21.2	
	3.1cm以上	10	55.5	9	47.7	
3.星の数	1~3個	2	11	2	10.6	
	4~10個	6	33	4	21.2	
	11個以上	10	55.5	13	68.9	
4.星の形	スター印	13	71.5	13	68.9	
	丸	2	11	2	10.6	
	変形	2	11	3	15.9	
	流れ星	2	11	2	10.6	
	混合	1	5.5	1	5.3	
5.月	満月	2	11	2	10.6	
	右弦	1	5.5	1	5.3	
	左弦	5	27.5	3	15.9	
	扇型	0	0	4	21.2	
6.波形	大波	4	22	8	42.4	
	三角波	1	5.5	1	5.3	
	漣波	9	49.5	8	42.4	
	なぎ	2	11	2	10.6	
	凍結	2	11	0	0	
7.描き方	なし	0	0	0	0	
	強い	5	27.5	7	37.1	
	普通	12	66	10	53	
	薄い	1	5.5	2	10.6	
8.その他	暗い空	4	22	4	21.2	
	暗い海	2	11	13	68.9	
	砂浜	3	16.5	3	15.9	
9.不適応	あり	6	33	16	84.8	*

† $p < .10$  \* $p < .05$  \*\* $p < .01$

星と波の距離：0～1cmは高群38.5%・低群10.6%、3.1cm以上は高群49.5%・低群47.7%で有意傾向が認められた。まず、2群とも共通して、対人関係は稀薄な傾向がある。しかし、高群は低群よりやや対人関係が親和的である。

波形：大波は高群22%・低群42.4%であった。

描き方：強い・荒いは高群27.5%・低群37.1%であった。これらのことから、低群は情緒不安定で、キレやすいようである。

付加物：ありは高群33%・低群84.4%で有意差が認められた。低群に逸脱傾向が窺がわれる。

(2) 女子の高・低群間における検討

$\chi^2$ 検定を用いて2群間の比較検討した結果を表6に示す。

表6 女子の星と波テストの高・低群の $\chi^2$ 検定の結果

項目		高群		低群		有意差
		N	%	N	%	
1.空と海の バランス	1:1	15	65.3	8	40	
	1:2	1	4.3	3	15	
	2:1	6	26.1	7	35	
	5:1	1	4.3	0	0	
	その他	0	0	0	0	
2.星と波の 距離	0~1cm	8	34.8	5	25	
	1.1~2cm	9	39.2	2	10	
	2.1~3cm	4	17.4	6	30	
	3.1cm以上	2	8.7	7	35	*
3.星の数	1~3個	1	4.3	0	0	
	4~10個	8	34.8	15	75	
	11個以上	14	60.9	5	25	*
4.星の形	スター印	13	56.6	12	60	
	丸	3	13.1	0	0	
	変形	1	4.3	4	20	
	流れ星	3	13.1	3	15	
	混合	4	17.4	3	15	
5.月	満月	4	17.4	3	15	
	右弦	2	8.7	1	5	
	左弦	7	30.5	4	20	
	扇型	0	0	0	0	
6.波形	大波	3	13.1	3	15	
	三角波	4	17.4	2	10	
	漣波	2	8.7	8	40	
	なぎ	13	56.5	5	25	
	凍結	0	0	1	5	†
	なし	0	0	0	0	
7.描き方	強い	6	26.1	3	15	
	普通	16	69.6	16	80	
	薄い	1	4.3	1	5	
	暗い空	3	13.1	3	15	
8.その他	暗い海	1	4.3	1	5	
	砂浜	1	4.3	2	10	
9.不適応	あり	9	39.2	9	45	

† $p < .10$  \* $p < .05$  \*\* $p < .01$

星と波の距離：0～1cmは高群34.8%・低群25%、3.1cm以上は高群8.7%・低群35%で有意差が認められた。高群は対人関係が親和的であるが、低群は稀薄である。

星の数：11個以上は高群60.9%・低群25%で有意差が認められた。高群は交友関係が広いのに対して、低群は友人が少ない。月：左弦の月は高群30.5%・低群20%、月がないは高群43.5%・低群60%で、高群は母親に親和的であるが、低群はやや母親との関係も希薄である。(図5、図6)

波形：凧は高群56.5%・低群25%、漣は高群8.7%、低群40%で有意傾向が認められた。高群は情緒が安定しているが、低群は、男子と同様に焦燥感がある。

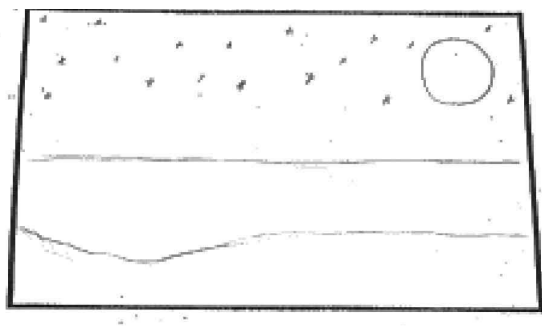


図5 女子の高群の星と波テスト結果  
星の数が多く月がある

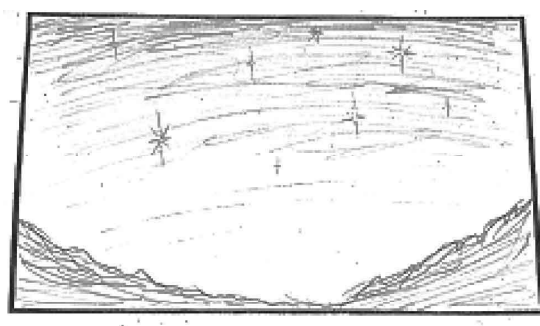


図6 低群の星と波テスト結果  
月がなく暗い

小括：高群は情緒が安定し対人関係や母親とも親和的であるが、低群は情緒不安定で焦燥感も

あり、問題行動を起こし易い、母親との関係も希薄である。

高群の男女共、情緒は安定し対人関係は親和的であるのに対して、低群の男女とも焦燥感があり、対人関係は稀薄である。なお、女子より男子は、対人関係は稀薄な傾向が認められる。これは、ひきこもりに男子が多いことに関係するようである。

先の調査でも自我同一性尺度の高得点群は、情緒が安定しているのに対して、低群は、情緒不安定で防衛は硬く、逃避傾向があった。今回の結果も同様の傾向が得られた(橋本, 2006)。さらに、女子の方が、情緒と知性のバランスが取れているのに対して、引きこもり傾向のある文系の男子は、調和が取れていなかった結果にも一致すると考察される(橋本, 2002)。

### 3) ワルテック描画テスト

#### (1) 高・低群における検討

2群の各図に対する反応の出現数を、 $\chi^2$ 検定を用いて比較検討した結果を表7に示す。

表7 ワルテック描画テストの高・低群の $\chi^2$ 検定の結果

図1の反応の種類	高群		低群		有意差
	N	%	N	%	
人物	6	14	10	26.3	
図・標識	10	23.3	7	18.4	
動物・昆虫	14	32.6	8	21.1	
植物	4	9.3	4	10.5	
建物・道具	7	16.3	7	18.4	
乗り物	0	0	0	0	
自然	1	2.3	0	0	
服・アクセサリ	0	0	2	5.3	
その他	1	2.3	0	0	n.s.

図2の反応の種類	高群		低群		有意差
	N	%	N	%	
人物	26	57.8	27	55.1	
図・標識	2	4.4	4	8.2	
動物・昆虫	7	15.6	7	14.3	
植物	4	8.9	5	10.2	
建物・道具	1	2.2	0	0	
乗り物	0	0	2	4.1	
自然	3	6.7	2	4.1	
服・アクセサリ	2	4.4	2	4.1	
その他	0	0	0	0	n.s.

図3の反応の種類	高群		低群		有意差
	N	%	N	%	
人物	8	14	8	17	
図・標識	24	42.1	26	55.3	
動物・昆虫	2	3.5	0	0	
植物	7	12.3	2	4.3	
建物・道具	11	19.3	7	14.9	
乗り物	1	1.8	1	2.1	
自然	4	7	3	6.4	
服・アクセサリ	0	0	0	0	
その他	0	0	0	0	n.s.

図4の反応の種類	高群		低群		有意差
	N	%	N	%	
人物	17	37.8	12	29.3	
図・標識	14	31.1	12	29.3	
動物・昆虫	1	2.2	3	7.3	
植物	2	4.4	2	4.9	
建物・道具	8	17.8	7	17.1	
乗り物	0	0	0	0	
自然	1	2.2	1	2.4	
服・アクセサリ	2	4.4	4	9.8	
その他	0	0	0	0	n.s.

図5の反応の種類	高群		低群		有意差
	N	%	N	%	
人物	10	20	7	14.6	
図・標識 図5	6	12	5	10.4	
動物・昆虫	3	6	3	6.3	
植物	2	4	2	4.2	
建物・道具	17	34	17	35.4	
乗り物	1	2	4	8.3	
自然	2	4	2	4.2	
服・アクセサリ	6	12	5	10.4	
その他	3	6	3	6.3	n.s.

図6の反応の種類	高群		低群		有意差
	N	%	N	%	
人物	9	17.3	9	22.5	
図・標識	12	23.1	14	35	
動物・昆虫	3	5.8	0	0	
植物	1	1.9	0	0	
建物・道具	20	38.5	7	17.5	
乗り物	2	3.8	7	17.5	
自然	2	3.8	0	0	
服・アクセサリ	3	5.8	1	2.5	
その他	0	0	2	5	*

図7の反応の種類	高群		低群		有意差
	N	%	N	%	
人物	11	23.9	7	16.7	
図・標識	6	13	8	19	
動物・昆虫	11	23.9	6	14.3	
植物	4	8.7	9	21.4	
建物・道具	5	10.9	1	2.4	
乗り物	0	0	3	7.1	
自然	2	4.3	0	0	
服・アクセサリ	5	10.9	2	4.8	
その他	2	4.3	6	14.3	†

図8の反応の種類	高群		低群		有意差
	N	%	N	%	
人物	27	60	14	33.3	
図・標識	2	4.4	6	14.3	
動物・昆虫	2	4.4	3	7.1	
植物	2	4.4	3	7.1	
建物・道具	3	6.7	7	16.7	
乗り物	2	4.4	1	2.4	
自然	4	8.9	4	9.5	
服・アクセサリ	1	2.2	4	9.5	
その他	2	4.4	0	0	†

† p < .10 \* p < .05



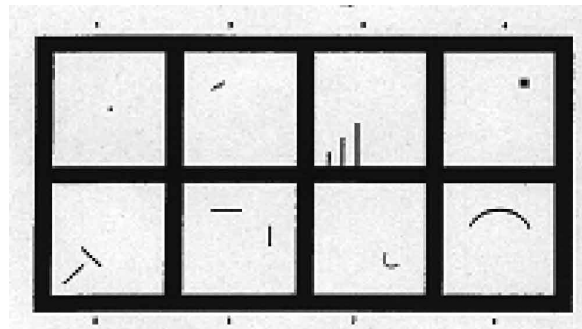


図7 ワルテッグ描画テストの各図形（上段左から図1～図4、下段左から図5～図8）

描画テストの図6の図形で有意差 ( $p < .05$ )、図7・図8の図型で有意傾向 ( $p < .10$ ) が認められた。以下、反応内容を検討する。

図6の図形のテーマは統合性である。高群は建物・道具38.5%、低群は標識・図35%であった。高群は建物から情緒の安定性を、低群は図型から対人適応に柔軟性を欠いている。

図7の図形のテーマは感受性である。高群は人物と動物が各々23.9%から、対人関係はよい。低群は植物16.7%で受動的・逃避的である。

図8の図形のテーマは安心感である。高群は人物60%、低群33.3%から高群は対人関係が安定している。

### (2) 男子の高・低群における検討

$\chi^2$ 検定で2群間の比較検討を行ったが、有意差が認められなかった。高・低群とも2・3・4・5・7・8の各図形で種類も順位も類似していた。しかし、次の各図形で種類が異なっていた。図1の図形のテーマは経験である。高群は標識・図42.1%、低群は人物36.8%から、高群は防衛的であるのに対して、低群は対人緊張が強いようである。図6の図形のテーマは統合性である。高群 建物40%、低群 図形50%から、高群は情緒が安定しているのに対して、低群は対人適応に柔軟性を欠くようである。

### (3) 女子の高・低群における検討

2群の各図に対する反応の出現数を、 $\chi^2$ 検定を用いて比較検討した結果を表8に示す。描画テストの図6の図形で有意差 ( $p < .05$ )、図7に有意傾向 ( $p < .10$ ) が認められた。

図6の図形のテーマは統合性であり、高群は建物28.6%・人物21.4%、低群は乗り物28.6%・図型23.8%であった(図8)。図7の図形のテーマは感受性であり、高群は人物25.9%・動物18.5%、低群は図形30.4%・植物21.7%であった(図9)。このことから、高群は情緒が安定し、対人関係に関心があり適応もよい。低群は、対人関係は柔軟性に欠け、消極的で逃避的である。

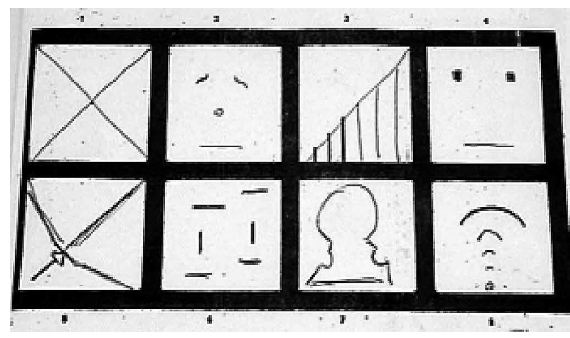
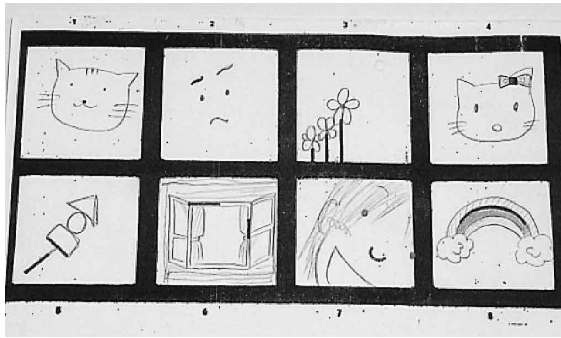


図8 女子高群のワルテック描画テスト結果 図9 女子低群のワルテック描画テスト結果

### 小括

全体的に高群は情緒も安定し対人適応もよいが、低群の対人関係は柔軟性を欠き逃避的である。

男子の高・低群間では、高群は理性的・防衛的であるのに対して、低群は対人緊張が認められる。女子の高・低群間では、高群は情緒も安定し対人適応もよい。低群は消極・逃避的である。

愛着尺度とEQテストとの相関をPearson積率相関係数で検討したところ $r = 0.20$ で、弱い正相関があり、有意差 ( $p < .01$ ) が認められた。従って、これまでの心理検査結果の信頼性を、裏付けるものと考察される。

### 結語

大学生を対象にして、幼児期における父親との愛着尺度により高・低群に群分して、EQテスト・星と波テスト・ワルテック描画テストの結果を検討した。

次のような結果が得られた。高群は情緒も安定し対人適応はよく、社会性を有している。これに対して、低群は情緒不安定で、対人適応は柔軟性を欠き消極的である。特に高群の女子が低群の女子よりも、情緒が安定し対人関係も良く、自己洞察・自己コントロール・愛他心・共感的理解・社会的スキルといった好ましい特性が認められた。

したがって、高群の場合は父親との愛着の絆が結ばれていて、そのことが効果的に作用していると考察される。低群は父親との関係が稀薄であることに、いわゆる「父なき社会」の負の世代間伝達や「友達のような父親」の影響が及んでいると解釈される。確かに、先行研究でもアパシー群は家族関係が稀薄であるのに対して、アパシー群でない場合は、親和的であったことから、幼児期の親と子供の基本的信頼関係が、青年期に重要な意味を持つものと解釈される(橋本, 2006)。

現代青少年の暴力行為・引きこもり・ネトゲ廃人等の問題行動防止のためにも、家庭に於ける「父親の役割」の重要性を見直す時がきているものと考察される。

表8 女子のワルテック描画テストの高・低群の $\chi^2$ 検定の結果

図1の反応の種類	高群		低群		有意差
	N	%	N	%	
人物	4	16.7	4	20	
図・標識	2	8.3	1	5	
動物・昆虫	9	37.5	5	25	
植物	4	16.7	4	20	
建物・道具	3	12.5	5	25	
乗り物	0	0	0	0	
自然	1	4.2	0	0	
服・アクセサリ	0	0	0	0	
その他	1	4.2	1	5	n.s.

図2の反応の種類	高群		低群		有意差
	N	%	N	%	
人物	14	53.8	15	75	
図・標識	0	0	2	10	
動物・昆虫	5	19.2	3	15	
植物	2	7.7	0	0	
建物・道具	1	3.8	0	0	
乗り物	0	0	0	0	
自然	3	11.5	0	0	
服・アクセサリ	0	0	0	0	
その他	1	3.8	0	0	n.s.

図3の反応の種類	高群		低群		有意差
	N	%	N	%	
人物	5	14.3	5	17.9	
図・標識	12	34.3	14	50	
動物・昆虫	2	5.7	0	0	
植物	6	17.1	1	3.6	
建物・道具	7	20	5	17.9	
乗り物	0	0	0	0	
自然	3	8.6	3	10.7	
服・アクセサリ	0	0	0	0	
その他	0	0	0	0	n.s.

図4の反応の種類	高群		低群		有意差
	N	%	N	%	
人物	10	41.7	6	28.6	
図・標識	6	25	6	28.6	
動物・昆虫	1	4.2	2	9.5	
植物	1	4.2	2	9.5	
建物・道具	4	16.7	3	14.3	
乗り物	0	0	0	0	
自然	1	4.2	0	0	
服・アクセサリ	1	4.2	0	0	
その他	0	0	2	9.5	n.s.

図5の反応の種類	高群		低群		有意差
	N	%	N	%	
人物	7	25.9	6	25	
図・標識 図5	1	3.7	5	20.8	
動物・昆虫	2	7.4	1	4.2	
植物	2	7.4	1	4.2	
建物・道具	9	33.3	7	29.2	
乗り物	1	3.7	0	0	
自然	1	3.7	0	0	
服・アクセサリ	3	11.1	0	0	
その他	1	3.7	4	16.7	n.s.

図6の反応の種類	高群		低群		有意差
	N	%	N	%	
人物	6	21.4	4	19	
図・標識	4	14.3	5	23.8	
動物・昆虫	3	10.7	0	0	
植物	2	7.1	0	0	
建物・道具	8	28.6	4	19	
乗り物	0	0	6	28.6	
自然	2	7.1	0	0	
服・アクセサリ	0	0	1	4.8	
その他	3	10.7	1	4.8*	

図7の反応の種類	高群		低群		有意差
	N	%	N	%	
人物	7	25.9	4	17.4	
図・標識	2	7.4	5	21.7	
動物・昆虫	5	18.5	0	0	
植物	3	11.1	7	30.4	
建物・道具	3	11.1	0	0	
乗り物	0	0	1	4.3	
自然	2	7.4	0	0	
服・アクセサリ	3	11.1	5	21.7	
その他	2	7.4	1	4.3†	

図8の反応の種類	高群		低群		有意差
	N	%	N	%	
人物	13	56.5	8	36.4	
図・標識	1	4.3	1	4.5	
動物・昆虫	2	8.7	2	9.1	
植物	1	4.3	3	13.6	
建物・道具	0	0	3	13.6	
乗り物	0	0	1	4.5	
自然	4	17.4	3	13.6	
服・アクセサリ	1	4.3	0	0	
その他	1	4.3	1	4.5	n.s.

† $p<.10$  \* $p<.05$

## 参考・引用文献

- Bowlby, J. (1976). 黒田実朗 他訳 母子関係の理論 I 愛着行動 岩崎学術出版
- ブルーノ・リーネル他 (2000). 星と波テスト入門 川島書店
- ダニエル・ゴールマン (1996). こころの知能指数 講談社
- 福屋武人・松原由枝 (1996). 描画を技法としてどう使うか—ワルテック描画テストを中心に—  
臨床描画研究 X I 金剛出版
- 橋本泰子 (2002). 心理学的アセスメントによるアパシー傾向の一考察 文教大学人間科学研究 24,  
53 ~ 66.
- 橋本泰子 (2002). 学生の社会的ひきこもり傾向の研究—SCT・TEG・SWT・WZT— 文教大学 臨  
床相談研究紀要 6, 17~39.
- 橋本泰子 (2002). スチューデント・アパシー傾向の一考察 桜美林論集 33, 93 ~ 107.
- 育児男子 (2010). 3月31日 毎日新聞
- 林道義 (1996). 父性の復権 中公新書
- 柏木恵子 (1994). 「親になる」ことによる人格発達 発達心理学研究 5, 72~83.
- 春日由美 (2000). 日本における父娘関係研究の展望—娘にとっての父親— 九州大学心理学研究 1,  
157 ~ 171.
- 久保田まり (1995). アタッチメントの研究 内的ワーキングモデルの形成と発達 川島書店
- 文部科学省 (2010). 4月3日 問題行動調査 毎日新聞
- ネゲト廃人 (2009). 6月24日 毎日新聞
- 島谷綾子・橋本泰子 (2008). 父親との愛着尺度 (未発表)
- 高塚雄介 (2008). 2月23日 ひきこもり 都内在住調査 毎日新聞
- 詫間武俊・渥美玲子 (1967). ワルテック描画テスト臨床心理検査法 医学書院
- 八木下暁子 (2010). 日本発達心理学会第21回大会発表論文集 157

## 謝辞

桜美林大学院 院生木村亜弥子さん、桜美林大学リベラルアーツ学群 一條祐樹さん 荒木  
みさこさん に協力頂きました、感謝申し上げます。